

台湾に学ぶ演劇教育の実践2

— 林玫君教授のアイホールにおけるワークショップから —

How to learn drama education from Taiwan 2;
From Professor Lin Meijun's Workshop in AI・HALL

中山 文

NAKAYAMA Fumi

投稿日：2020年3月31日

受理日：2020年11月6日

(要約)

2019年7月、筆者は伊丹市立演劇ホール（通称アイホール）と協力し、林玫君台南大学芸術学部長の講演会・ワークショップ「台湾に学ぶ『演劇教育』の今」を開催した。本ワークショップでは参加対象を学校教育関係者にしぼったため、中学・高校で演劇部顧問を務める教員が多数参加した。コンクールでの上位入賞を目標とする日本の演劇部の活動とは異なり、台湾では演劇をゲームの延長として楽しむ過程が重要とされている。その上で、演劇を教育に利用することによって自主性、創造性、コミュニケーション能力を養うことができるという信念をもち、義務教育の指導要領やテキストが作成されている。その教育方針は大学におけるゼミ教育にとっても、学ぶべき点が多いことを指摘した。

キーワード：台湾、演劇教育、ドラマワーク、演劇ワークショップ、ファシリテーション

はじめに

2019年7月、筆者は伊丹市立演劇ホール（通称アイホール）と協力し、林玫君台南大学芸術学部長の講演会・ワークショップ「台湾に学ぶ『演劇教育』の今」を開催した。拙論はその経緯、ワークショップ内容、参加者アンケート、専門家の感想、考察で構成されている。林教授の講演会が演劇に興味をもつ教育者に与えた影響を記録し、大学教育において演劇教育実践の可能性について考察するものである。

I・経緯

「人見知りなので、話しかけて下さい」。2012年、2年次生ゼミの自己紹介であまりに多くの学生がこの台詞を口にするに、思わず頭を抱えた。全員が話しかけられることを待っていて、いつ会話が始まるのだ？

学生の社交性やコミュニケーション能力育成について、大きなヒントを与えてくれたのが中国浙江大学の桂迎教授だった¹。教授は長年学生演劇を指導した経験から、劇場に足を踏み入れたこともない普通の学生が演劇を通していかに成長するかを熱く語られた。演劇は作、演出、音響、照明、美術、制作など多くの仕事を含み、どの場面でも必ず他者との話し合いが必要になる。その過程すべてが人間性を鍛えるトレーニングであり、上演を完成させた一体感は大学時代の輝かしい思い出として一生の宝物になると言う。

桂教授の指導方法は日本でも、我が神戸学院大学人文学部でも有効なのだろうか。それを証明したい一心で科研費申請を行い、2015年に「演劇ワークショップの教育的役割とファシリテーター育成に関する日中台比較研究」科研費JP15K04268（平成27～29年度）が採択された。

2016年に桂迎教授を招聘し、3年次ゼミ生を対象に15回の演劇ワークショップを開催してもらった。その成果として「居場所」をテーマに上演を行い、120名の観客を集めた²。日中の指導者を比較するために、2017年は2人の日本人演出家³を招いて前年と同様の経過を経て上演を行った。その結果、学生間のコミュニケーションが円滑になるなど一定の効果があることが確認された。だが、ワークの選択・評価基準の策定・教員のスタンスなど、まだ開発されるべき領域があることを感じた⁴。

特に2017年には、ある学生が最初から突出したリーダーシップを見せた結果、周囲は振り回されるままで統一が取れず、本番の2週間前に作品を一から作り直すという苦い経験をした。「空気を読むこと」を習慣化してきた日本の学生にとって、同級生に「NO」ということがどれほど難しいかを教えられた。

この失敗が次の着想を生んだ。個人主義の徹底した欧米や幼いころからリーダーシップ教育を受ける中国大陸よりも、日本人に近いメンタリティをもつ台湾の先進例に学ぶ有効性を改めて痛感したのである。実はそれ以前から台湾が先進的な演劇教育を行っているという話は耳にしており、2017年3月には台南大学を訪問して林教授と面識を得ていた。

2018年1月、3年間の科研活動を総括して国際シンポジウム「大学生における演劇教育の効果とファシリテーターの役割 ―日本・中国・台湾比較」を開催した。そこにお招きした台南大学の林

教授の発表は台湾における演劇教育の経過と成果を紹介したもので、演劇と教育に興味をもつ参加者たちからの反応は大きかった⁵。

台湾では新世紀にむけた2000年に、義務教育における大幅なカリキュラム変革が行われた。ここでは「コミュニケーション能力」「想像力」が重視され、その結果として、芸術教育のカリキュラムに音楽、美術と並んで演劇が取り入れられたのである。

しかも、林教授こそがそのカリキュラム策定を行った中心人物だった。台南大学戯劇創作と応用学系を立ち上げた林教授はこの分野における先駆者であり、すでに東アジアにおいてもっとも高い研究成果を上げ、なおそれを教育行政に反映させている第一人者なのだ。

日本の学校現場に演劇教育というものがあるとすれば、それを中心的に担っているのは演劇部顧問の先生方であろう。たとえ彼らがその教育的効果をいかに主張しようと、演劇が音楽や美術と並んで義務教育カリキュラムに取り入れられる兆しはない。林教授の発表は、シンポジウムに参加していた高校演劇部顧問の先生方に大きな勇気を与えたという⁶。台湾社会では、学校における演劇教育の成果がどのように評価されているのだろうか？ その実践方法は日本の教育現場においても汎用ができるものなのだろうか？

次のチャンスが巡ってきたのは2018年8月である。筆者はちょうど長栄大学語学研修の引率として台南に滞在しており、8月17～19日まで台南文化センターで行われた「第4回16歳小戯節」に参加できた。台南では昔から16歳が成人とされてきたが、本イベントは成人儀式を芸術と教育の結合に転化し、劇場で新たな成人式を行うことを目的とする。具体的には台南文化局が指導して高校生対象の演劇ワークショップを行い、その成果として舞台上演を行うのである。パンフレットによると、「成長段階にある高校生が自分の経験を振り返り、物語を紡ぎ、上演創作を行う。観客はそれを見届け、劇場で彼らが大人になるための洗礼を与える」という趣旨で行われているのだ。

劇場ホールには大きな鹿の角のオブジェが飾られている。鹿の角は大人の象徴である。大人の階段を上り始めた少年少女たちの思春期の悩みこそが、この演劇祭のテーマだとわかる。葉っぱを模した折り紙には、両親への耳の痛いコメントが書かれている。「うるさい。それ、本当に私のためなの？」「もう放っておいて。」「誰もわかってくれない。私の気持ち考えたことある？」「うざい、自分の人生は自分で決める。」「もう疲れた。私、これ以上頑張れない……」

客席は家族、友達、先生たちで早々に満席になった。上演前に台南文化局副局長（女性）が舞台上に立った。儀礼的な開会の挨拶が行われるのだろうと思っていたら、彼女は「息子がこのイベントに3年前から連続で出演していますが、この間の成長ぶりに心から感謝しています」と話し、涙で言葉を詰まらせた。母親としての思いが客席に伝わり、仲間に冷やかされて照れている息子さんの姿がなんとも微笑ましい。

上演が始まると、セリフのほとんどが台湾語で、筆者にはほぼ聞き取れなかった。しかし大意は十分に通じ、どの作品も感動的だった。親の期待の重さ、親への反発、親離れの不安と自由への渴望、親の病気によってはじめて生まれた感謝の念、小さくなった祖母の背中に優しい言葉をかけられなかった自分への怒り、ダンス「束縛」……思春期の真剣な悩みは、国を超えて心に刺さった。アフタートークでは次々と手が上がり、涙ぐむ発言者もいた。筆者は何よりも、高校生のアイデアの魅力を最大限に引き出して感動的な作品に仕上げた、大人たちの仕事ぶりに感服した。

そこで、演出家にインタビューを申し入れた。2015年からこのイベントを任されている「影響・

新劇場」⁷のスタッフによると、主催者呂毅新をはじめ、ほぼ全員が欧米の大学で修士号をとっており、帰国後も林教授率いる台南大学戲劇創作与应用学系で研修を受けているという。

作品のコンセプトがしっかりしているのは、アカデミズムがサポートしているからではないだろうか。日本でも夏休みに中高生を集めて演劇ワークショップを開き、最後に上演を行うという試みはあちこちで行われている。だが大学がここまで現場に関わることは少なく、多くは良心的なホールが主導する形をとる。そのためどうしても経験主義になり理論化が弱くなる印象がある。

なによりも毎年この劇団に要請できるだけの予算や体制が、担保されていることに驚いた。その上で大学・現場・行政をうまく繋いでいるのが、林教授の功績なのだと理解した。林教授のパーソナリティはもとより、演劇教育の有効性をみんなで共有できるようにノウハウ化したところが、台湾における演劇教育成功のポイントであろう。

2018年8月、兵庫県は豊岡市で開校を目指している専門職大学の基本構想案を発表した⁸。演劇を専門的に学べる初の国公立大学で、学長には劇作家で演出家の平田オリザ氏が就任する予定である。演劇で身につける表現力を基に、観光や文化の分野で即戦力となる人材を育成するという。彼らにとっても、林教授が立ち上げた台南大学戲劇創作与应用学系は、その良いモデルとなるのではないだろうか。この学科では、いったいどのような授業をしているのだろうか。ぜひ、見てみたい。私自身が、林教授のワークショップをぜひ受講してみたい。

願いがかなったのは2019年7月である。日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）の助成を受けて、台南大学の林玫君教授を招聘し、2種類の演劇ワークショップを開催することができた。1つは筆者のゼミ学生を対象とし、神戸学院大学有瀬キャンパスで4日間（7月6、7、13、14日）開催した。もう1つは伊丹市立演劇ホール（通称アイホール）と連携し、演劇教育関係者を対象に行った（7月15日）。前者は演劇教育の授業を受ける学生のためのものであり、後者は学生を指導する先生方のためのものである。拙論では後者の指導案、参加者のアンケート結果、専門家の感想を記し、日本における演劇教育の可能性について考察する⁹。

II・レクチャー&ワークショップ「台湾における『演劇教育』の今」

今回のワークショップでは対象を演劇に興味をもつ学校教育関係者にしぼった。そこでまずアイホールに企画を持ち込み、場所の提供と宣伝をお願いした。交渉の結果、【令和元年度 AI・HALL 自主企画】アウトリーチにおけるワークショップ研究会レクチャー&ワークショップ（神戸学院大学×アイホール連携企画）として行われることになった¹⁰。

集客に際しては、日本学校演劇教育会関西支部に相談し協力を仰いだ。当支部には中学・高校の演劇部で顧問を務める先生方が多数参加されている。また、高校演劇界の重鎮である吉田美彦先生のアドバイスを得て、教員が参加しやすいように兵庫県教育委員会の後援を取りつけた。予想以上の反響で、あつという間に予定人数20人を突破した。このようなイベントを求めている人が必ずいることを知り、心強い。

当日は、以下のスケジュールで行われた。

時：7月15日（月・祝） 10：00～12：00 レクチャー／ 13：30～16：30 ワークショップ
所：伊丹アイホール、カルチャールームA（2階）

午前中に行われたレクチャーについては別雑誌に掲載の予定なので、本稿では午後に行われたワークショップの内容のみを取り上げたい。

(1) ウォーミングアップ (約30分間) (講師：クラリッサ 通訳：岩田弥生)

- ① タンバリンの音に合わせて、自由に歩く (普通のスPEED) / タンバリンの音2回で止まる
- ② (数回繰り返す) / ストップした状態で、指令「木になれ！」身体全体で表現し、「盆栽」・「岩肌」に張り付く松」等のタイトルをつける。 / 「竹になれ！」 / 「2人1組で龍になれ！」 / 「3人1組で山になれ！」 (例) 噴火した後の火山・ゴツゴツした岩肌の山 等 / 動物「犬になれ！」 (例) 獲物を狙う・足を上げてオシッコをしている 等 / 「2人1組でキリンになれ！」



(写真①)



(写真②)

- ③ タンバリンに合わせて、自由に歩く / タンバリンの音2回で、指示された人数でハグする。
3人→5人→7人→3人1組の班を作る。
- ④ 森林大災害：2人で木を作り、1人はその中に住むリスになる。
「ハンター！」：リスが別の木に移動。親がリスとなり加わるので木が足りなくなる
→ イス取りゲーム感覚になる。
「火事！」：木が移動。別の相手と組み、リスの上で新たな木になる。
「ハンター！」と「火事！」を繰り返す。
「地震！」：木もリスも移動し、新たな場所で木とリスになる。
あぶれた者が親になり、「ハンター」「火事」「地震」をランダムに繰り返す。
- ⑤ ウォーミングアップの解説 (約40分)
講師：林玫君 通訳：岩田弥生
・意義：身体を動かし体温を上げ、集中力を高める。身体を解すことで、リラックス効果もある。
一緒に身体を動かすことで、仲間とのコミュニケーションを図る。
・具体例 (初級～上級) の説明：名前覚えゲーム (仲間意識をもつ) ・3人1組で「木」「象」「梟」を表現する (集中力を養う) ・2人1組で「雲」を表現する。(想像力を使い、身体と空間で高低差のある形を作る) ・2人1組で「鏡」ゲーム (互いの距離感の確認) ・「番犬」ゲーム (聴覚に集中する)。

(2) 「かぐや姫」をドラマ化する (講師：林玫君 通訳：中山文)

- ① 「かぐや姫」の絵本を朗読し、内容を確認する。

② 6人1班となり、各班3つのシーン（静止画）を作る。

A班はかぐや姫の赤ん坊時代、B班は幼少期、C班は成人期についてのシーンを担当する。
創作時間は10分間。

【発表】では以下の静止画が作られた。（写真③④）

A班 ・おじいさんが竹の中のかぐや姫を発見する／お乳を与える／あやす

B班 ・竹馬遊び／山菜取り（その他のお手伝い）／反抗期

C班 ・お琴の練習／お化粧／帝の使いとの対面



(写真③)



(写真④)

③ 別れのシーン。2人1組で、かぐや姫とおじいさん（または、おばあさん）になる。

かぐや姫は帝を含む多くの貴族たちの求婚をうけ、おじいさんからは月に帰らぬよう説得される。その時のかぐや姫の心情を考える。

「・まだまだお嫁には行きたくない・自分のことを1番に考えてくれているのは両親・その2人がお嫁に行くのが1番幸せなことだと言うのであればそれに従う・どうすることが自分にとって、最良なのかと悩む。」等。

月と地球をラインの両端とし、かぐや姫の思いの位置に立つ（写真⑤）



(写真⑤)

- ④ 月の使者のもとに続く白い道。歩き始めたかぐや姫を引き止めるために、おじいさん（おばあさん）が必死に声をかける。

私見：(1) ウォーミングアップのワーク自体は直前にKACで学生向けに行われたものと同じで、決して特別なものではなかった。だが、演劇ワークショップ初体験で緊張気味の学生が集まった前回とは異なり、今回は受講生が手練れの集団である。会場には最初から「楽しむぞ！」という気分全開の参加者も多く、それが周囲へ伝播していくのがよくわかる。

「〇〇になれ！」という指令に従い、身体全体で表現して自分なりのタイトルをつけるというワークでは、林教授がもれなく全員に声をかけて注目を集める。タイトルのうまさに関心したり、意外なアイデアに驚いたり、笑顔が広がる。班ごとの話し合いでも笑い声が絶えず、その結果高低差を意識した面白い形のものが出来上がっている（写真②）。演劇初心者の学生たちにとって、高低差をつけた形を作るのはあんなに難しかったのに、演劇に慣れた参加者にとっては当たり前なのだ。「自分をどのように見せるか」「自分がどのように見えているか」を考えること自体、普通の学生には新しい経験だったのだと気が付いた。

- (2) 「かぐや姫」のドラマ化については、どの班もたいへん見ごたえのある静止画を作られた。高低差のある画面の面白さだけでなく、籠を背負う姿を2人で表現したり、山菜を手で表現したり、身体を使うアイデアが面白く、学生たちとの差を感じた。だがかぐや姫の心情を問うワークでは学生たちと類似した意見が多く、演劇に親しんだ経験が身体表現の自由度を大きくアップさせることを痛感した。

Ⅲ・参加者アンケートと考察

(1) 「台湾に学ぶ『演劇教育』の今」レクチャー&ワークショップアンケート

【お客様についてお聞かせ下さい】

① 現在のお住まい

兵庫県外	兵庫県内	伊丹市	無回答
15	7	1	1
大阪府・京都府・奈良県 愛知県・静岡県・岐阜県	尼崎市・神戸市 芦屋市・加東市		

② 年代

10代	20代	30代	40代
1	1	6	5
50代	60代	70代	無回答
6	3	1	1

③ ご来場前後、買物、または飲食での近隣店舗の利用有無

買物利用	飲食利用	両方
5	11	2
利用なし	無回答	
2	4	

【レクチャー&ワークショップについてお聞かせ下さい】

① どこでお知りになりましたか？（複数回答可）

アイホールツイッター	アイホールホームページ	無回答
1	2	4
チラシ	その他	
4	13	
・アイホール	・一心寺シアターでの公演 ・知人から ・神戸学院大学	・アイホールメルマガ ・関西演劇教育関係 ・NPO 日本演劇教育会

② 受講の動機は何ですか？（複数回答可）

演劇教育に興味がある	林政君教授のレクチャー&ワークショップに興味がある
20	6
台湾の教育制度に興味がある	演劇を使った授業に興味がある
8	11
教育現場に関わっている	知人のすすめ
11	1
その他	無回答
1	1
人に見せることを目的としない演劇に興味がある	

④ レクチャー&ワークショップはいかがでしたか？

たいへん満足	満足	普通
11	8	0
やや不満	不満	無回答
0	0	5

⑤ お気づきの点、印象に残ったこと、新たな発見等、ございましたら教えてください。

- ・ 自主性、創造性を伸ばす方法として、演劇を取り入れる台湾の教育現場がとても興味深い。
- ・ 即興性について、教師にも強く求められるということが印象的でした。
- ・ 台湾の演劇教育の指導要領、教育課程の全体像の概要を知ることができて良かったと思います。資料自体が貴重なものでした。
- ・ 台湾では、小・中で演劇教育が必修とのこと。それも3コマとは驚きでした。
- ・ かぐや姫について、様々な見方ができた。
- ・ 1つの物語を参加者全員で共有し、理解する方法が多々あるということ。身体を使ったあと「書く」課題を出すと、どんどん書けるということ。

- ・「かぐや姫」のワークショップで、自分が思っていた以上に言葉が出てこなかった。かぐや姫と自分をどのくらいリンクさせれば良いのかが分からなかった。かぐや姫の気持ちを想像しても、実際に私が感じることにズレが生じてしまった。
- ・普段は、ワークショップを講師の立場とする事があるのですが、今回改めて、どういった意図で行うのか？その効果は？など、言葉にさせていただいたので色々と発見があり、楽しかったです。
- ・身体を動かすことで空間や仲間をよく見ることができ、場の雰囲気良くなるということ、文章を書けるようになるということ、が発見でした。ありがとうございました。
- ・台湾の演劇教育の内容が知れて、とても勉強になりました。日本でも、演劇教育が広がれば良いのに、と切に願うようになりました。
- ・普段から、学校でしていることが多かった。
- ・身体（の動き）に自信を持たせる、グローバル社会では目で物を言うことが必要。非常に興味深かった。
- ・台湾での取り組みを初めて知り、驚きました。小・中の義務教育下での取り組みについて知ることが出来た。
- ・「観客に見せるのが目的ではない」というのが、新鮮で驚きでした。
- ・かぐや姫のワークショップが面白かったです。
- ・講師の方の解説が丁寧で、場面場面での具体的な応用方法が分かりやすかったです。

⑥ その他、ご意見・ご感想をお願い致します

- ・とても面白かったです。「楽しく、自分たちで考える」というのがとても良いな、と思いました。学生達の「恥ずかしい」という気持ちをどう、解していくかというのが、教える側の課題だと思うので、それを学べて良かったです。
- ・高校での取り組みについても、もっと知ることができれば良かったです。
- ・パワーポイント、日本語でお願いします。
- ・ありがとうございました。ただ、間に休憩時間を入れて欲しかったです（トイレ等）。
- ・勉強させて頂き、ありがとうございました。
- ・実践的な手法を体感させて頂き、貴重な時間となりました。ただ、自分が授業で、こういった場面で使っていくことができるのか？に関しては、まだまだ考える必要があります。
- ・教育や演劇に興味がある人がたくさんいて、それ自体が楽しかったです。参加者同士の交流などができれば、より、今日のワークショップの内容が活かされていくのではないかな？と思います。
- ・演劇を学んでも、内容如何では好きな人だけのものになってしまうし、何を学ぶかは明確にならなかった。正確な日本語と、共有できる文化を育んでいくようなものが必要だと思った。
- ・私自身、多様性教育に関心があり、その枠組みやあり方としての演劇教育（特に応用インプロヴィゼーション）を研究しようとしています。「プロセス重視であり、参加して声を出したことに評価・重点をおく」という点が、私にとってとても興味・印象深いです。また、テキストの選択等、文化差異などへの考慮には目を見張るものがあり、学びがありました。
- ・すごく刺激的でした。これからの日本でもこういった演劇教育等が必要だと思いました。
- ・もっと、林先生のお話を聞きたいと思いました。ぜひ、第2弾をお願い致します。

(2) アンケートからの考察

教育と演劇に興味をもつ参加者の集まりだったので、ワークショップ慣れした方が多く、順調な進行ができた。アンケートからは以下の3点についての驚きと発見が読み取れた。

第1に、台湾の演劇教育について。演劇教育が自主性、創造性、コミュニケーション力を養う授業として必修化しており、指導要領もテキストも厳密に作成されている。そこでは各アクティビティの意図や効果が明快に言語化される。第2に、即興性について。観客に見せるための演劇教育ではなく、ゲームの延長として楽しむ過程そのものに集中力、コミュニケーション力、想像力など多くの学びがある。また、教師にも必要とされる力である。第3に、ファシリテーターのテクニックについて。演劇教育に興味をもつ参加者だったからこそ、林教授が細心の注意を払ってワークを組み立て参加者に目配りにしていることに気づいている。学生対象のワークショップでは出てこない感想である。また、通訳、翻訳、休憩時間などについての厳しい指摘もあり、次回の国際ワークショップ開催時の反省点となった。

IV・ファシリテーター視点からの報告

ここでは本稿の資料として小原延之氏とFOペレイラ宏一朗氏の報告を紹介する。これは、筆者が日本での演劇ファシリテーターのプロの目に、林教授の教授法がどのように映るのかを知るために、前もって協力をお願いしていたものである。お2人の報告は、筆者が看過していた林教授の細心なファシリテーション技術に気づかせてくれる。

(1) 「林教授を迎えて」

劇作家・演出家 小原延之 (アイホールワークショップ研究会)

アイホール・アウトリーチにおけるワークショップ研究会では劇場と関わりの深いアーティストと共にワークショップ・プログラムを研究する他に、全国で活躍するファシリテーターを迎えて一般市民にも開放した講演会やワークショップも行っている。今回は神戸学院大学の中山文教授、伊藤茂教授のご尽力もあり、初めて海外からゲストを迎えることになった。林教授ご自身が実践するワークショップと変革してきた台湾の演劇教育の紹介は、演劇教育では後進国の我々にとって新鮮で実に興味深い学びの場となった。

林教授には2017年の冬、神戸学院大学でのシンポジウムでお会いしていた。その時も教授による短いワークショップが行われたのだが、新鮮かつ根源的な問いが参加者である我々に投げかけられた。それは「なぜ大切な授業の時間を割いて演劇を学ばなければならないのか？ファシリテーターが保護者を説得する。」というディスカッションを行うものである。

残念ながら圧倒的に保護者が勝利する。だが日本の教育現場では克服できずにいるが、台湾ではその答えが出ているのかもしれない。もちろん、我々にもいくつかの答えは用意できている。コミュニケーション能力の向上は言うまでもなく、2020年度の新大学入試から重要とされ、学習指導要領にも盛り込まれた「主体的、対話的で深い学び(アクティブラーニング)」との親和性が、演劇創作にはある。だが、私としてはまだそれが建前上のような気がして、未だこのお題に向き合い続けている。この初めてお会いした時に投げかけられた「問い」が私個人としての台湾の演劇教育と林教授との出会いでもあった。

実施された林教授によるワークショップには、NPO 法人日本学校演劇教育会関西支部の吉田美彦先生の呼びかけもあり教育関係者が多く、ワークショップでの導入部から結末まで全体の熱量も高く大成功を収めた。もちろん林教授の進行は見事なもので、故郷の物語を操るかのように日本の古典を日本人に解説する教授の多才ぶりには圧倒された。ワークショップはファシリテーターの魅力がなければ成果も半減されがちである。彼女が訓練された女優でも現場を持つ演出家でもないのがまた驚きである。フロントランナーとしての思想性が表現者としての凄みにもなっていた。

このワークショップの前に、神戸学院大学の中山ゼミでも少し違うアレンジで数日間に分けたワークショップが行われた。資料として紹介された写真と解説を見る限り、その成果が参加した学生たちの表情に見てとれた。序盤では受け身だった学生がみるみる内に表情がほぐれ、積極的になり、アーティストからの発想を享受し、互いにコミュニケーションをとりあって、最後にはそれぞれの学生たちに達成感による喜びが表情から、身体から溢れていた。私はのちに林教授のワークショップを経験した生徒たちと演劇作品をつくり上演したが、以前とはまるで違った協調性と創作の喜びを学生たちから感じる事ができた。学生たちにはこの経験を、個々の専門分野での成長に役立ててもらいたい。

林教授が実践したプログラムの内容に関して言えば、我々日本人にも馴染みのあるワークショップ・プログラムも見受けられた。もちろん日本人に配慮した部分もあるのだろうが、序盤のコミュニケーション・ゲームなどは私たちが実践しているもの（やはり多くは海外からのものをアレンジした）や呼称は違うが要素が類似しているものがあり、海外のメソッドを取り入れて自らのものに再構築している我々との共通項に親しみを感じた。

もちろん、我々の現状と台湾の現状は随分の隔りがある。大前提として義務教育の中に演劇が取り入れられている背景は、今回のワークショップからも垣間見えた。それはプログラム内容よりも、ファシリテーターのメソッドが確立している点である。これは確固とした養成機関のシステムが背景にあるのだろう。林教授の助手をされている方にしても、参加者に対する接し方、現場のムードづくり、センシティブな反応とリアクションは日本のそれと違ってオープンで、かつ賑やかだ。打楽器（タンバリン）を使った合図は、強制的な指示ではなく、明るく誰でも参加したくなるフェスティバルである。

またファシリテーターの声がすべての参加者へ均等にとどくように配慮し、腰からぶら下げられたコンパクトスピーカー、インカムなどは、ただの拡声器としての役割ではない。大きな声を出すと威圧的な声色になるところを、やさしい地声ですべての参加者を和ませることを可能にしている。

このような配慮は日本では見受けられない。演劇の捉え方そのものの文化の差異もあるのだろうが、私は養成機関の確立の差を強く感じた。すでに質問する機会を失ったが、将来、台湾で教育演劇の現場を見学する機会があるとするならば、ファシリテーター養成の中に我々が学べる要素が数多く含まれているだろうと推察する。

日本にもファシリテーターを養成する機関はあるのだが、まだ専門機関とは言えない。大阪大学のコミュニケーション・デザインセンターでの指導者養成は、どちらかと言えばプロデューサー養成であり、卒業生たちの実践的な現場は教育機関ではなく企業向けのワークショップ・プログラムが多いのではないかと感じている。もちろん大前提として国の方針の違いが大きい。

そして現状として演劇教育のファシリテーターの人材については、いくつかの問題がある。アーティストとして地位を確立しようとする人間は教育者ではない。たとえ教育現場に呼び込んでも、アーティスト性を担保された内容でなければ、その特性を真に活かすことができない。一貫した内

容をアーティストに強要しても芸術家を殺すことになる。またすべての教育者にアーティスト性を期待することは難しい。これは確固とした養成機関がない限り払拭できない。欧米のように俳優としての成功をあきらめた若者が、再び大学機関に入り直し、演劇教師となるケースが訪れるようなことは、この国ではまだまだ先のことだろう。

林教授の訪日は学びの多い好機であったが我々の乏しい現状を再確認する機会にもなった。ただ時代の潮流の変化に備え、私たちは先人に学び、万全の体制でいることが肝心である。

(2) レクチャー&ワークショップ「台湾に学ぶ『演劇教育』の今」報告書

FO ペレイラ 宏一朗

2019年7月15日(月祝)アイホールにて行われた企画「台湾に学ぶ『演劇教育』の今」に参加した。講師の林玫君氏(以下:林先生)は台南大学藝術學院院長。演劇創作・応用学科専任教授で、台湾の演劇教育を牽引する第一人者である。

午前中は林先生からのレクチャーではじまる。台湾での演劇教育事情を教えていただきつつ、日本の演劇教育が世界と比べ、非常に遅れていることを聞く。特に、台湾では25年前から行われており、小中学校では義務教育として組み込まれていると聞いて驚いた。日本でも、コミュニケーションの授業として演劇やダンスなど、パフォーマンスアーツを授業に組み込んでいる学校もあるが、けて多くはない。話の中で「演劇的なものを鑑賞できるような観客を育てる」ということを仰っていたが、これまで私は、それは我々表現者たちが行っていくべきことだと考えていたので、特に驚かされた。そもそも国の、文化に対するスタンスが大きく違うのである。大阪では数年前、日本の伝統芸能である文楽に対して当時の市長が「客をまず引き寄せるためには新作のわかりやすいものを作るべきでは?」という発言で物議を醸したが、それとは大きな違いである。

また、林先生は、文化を根付かせるためだけでなく、演劇教育を通して、目で話し、自分の意見を言う力が付くと信じている。これは、抽象的だと思われやすいが、実際林先生の授業を受けた学生は初日と最終日では印象が大きく違うらしい。日本の教育自体がどういうものかなど測れないが、こうした信念が試みと共に、演劇だけでなく、人生の中で、自分の行いたいことと向き合える機会を作るのだと実感した。

レクチャーでは、林先生は、演劇教育がどういうものか、またどのように参加者と接するのがよいかを説明された。演劇教育とは(林先生からの説明では)

- ・即興であること。
- ・観客に見せるものではない(本質は参加者)。
- ・どういったものが見えるか、ではなく過程が大事。
- ・人間の生活や経験を振り返る。である。

特に、学生の心を開かせるためには、そこにいる先生が心を開かなければいけない。心を開くことが恥ずかしくないのだと、先生が(その場のリーダー)が示さないといけないと、実際にいくつかのワークショップを行いながら説明された。いついかなる時も、過程を見守りながら、誰よりも楽しそうな林先生が印象的だった。

午後から行われたワークショップでは、レクチャーの参加者が殆どそのまま参加者となった。レクチャーと違い、普段林先生が行われているワークショップが、参加者を対象に行われた。ワーク

ショップは、主にグループで行うものが多かった。ルールを設け、他者と同じ目標に対して、自分がどう動くか、どう考えているかを主張するように導き、共同で作業をする。これだけで言えば、日本でも行われているワークショップの展開ではあるが、林先生は、参加者がリアルタイムで交わしている会話を、通訳を通して常に気にしておられた。過程が大事だとは言っても、会話内容までを気にしているファシリテーターは多くない気がする。

また、ワークショップの後半では、レクチャーの時にも話があった、「竹取物語」を理解し、分解し、再構築するものが行われた（このワークショップの前日まで、神戸学院大学の学生を対象に行われていたもの）。ベースとなる「竹取物語」の絵本を、神戸学院大学の教授である中山先生が読み聞かせ（これがとても素晴らしかった）、物語の理解を図る。そして、グループに分かれ、かぐや姫が過ごしたであろう赤ちゃん期・少女期・成人期を、三シーン、静止画として作るものが行われた。物語との整合性を気にしながら、できるだけ参加者がわかりやすい（経験した）ものが作られた。中でも、少女期のかぐや姫とおばあさんとの喧嘩のシーンはとても魅力的だった。

他にも、二人一組で、それぞれがかぐや姫とおじいさんになり、結婚の日、二人の胸に秘めた想いを考えたり、月へ向かうかぐや姫へ、おじいさんとおばあさんとして最後の声をかけるシーンなどが作られた。参加者によって異なる声掛けに、ここまでの過程がとても豊かだったことが分かる。

最後には参加者からの質疑応答の時間も設けられた。時間の都合上、短くはなったが、事前に頂いていた質問も含め、非常に開かれた時間となった。

最後に林先生から、演劇の研究は、長くても一年や二年のものが多いと聞く。林先生はそんな演劇の研究をもう二十五年間は続けてきている。とても忍耐力があり、また演劇というもののこれからの展望を、誰よりも信じているからだ。

全編を通して、「演劇教育」という枠組みの中、「何かを教える」というよりも、「他者との触れ合い方を育てる」という印象を持った。私が住む関西の小劇場界隈では、「何か一つの技術を持ち帰ってもらおう」とするワークショップが少なからずある。ファシリテーター毎に違いはあれど、「どのようなことをしているかわかりやすく伝えられる」し「認知度を増やし、創客に繋がる」からだ。それを否定するわけではないが、今回のワークショップのように「演劇を楽しむ」ということを、改めて考えられるようなものももっと多くあっていいだろう。「プロになる人材」を育てるものではなくても、明日の観客・プレイヤーを生み出すことにはきっと繋がっているはずだ。このような機会が、これから多く生まれることを望み、自分も行動しようと思った。

おわりに

今回のワークショップ参加者の多くは中学、高校の演劇部で顧問として学生を指導し、台本を書き、コンクール出場に導いた経験をもつ教員である。普段から演劇部員を指導しておられるものの、演劇学を専門に学んだ経験をもつ人は多くないはずで、大多数は学生時代の演劇部経験に基づいて、指導されている。その指導方法は、ご自身の経験に裏打ちされているとはいえ、どこか不安があったのではないかと思う。だからこそこのような機会をとらえては学ぼうとする。みなさんたいへん強い向学心をおもちの人たちなのだ。今回のワークショップは、そういう先生方の需要に応えるものとして意義があったと感じている。

日本の高校演劇部の多くは最終的にコンクールや発表会を目標として日々の稽古を重ねている。その点では文化部といえども、運動部が試合を目標に練習を重ねるのと同様である。しかし林教授のワークショップは、最終目標が演劇部とは決定的に異なっており、そのことにまず驚きの声が上がった。

林教授が専門とする演劇教育は、プロの俳優や演出家などの演劇関係者を養成したりプロの演劇を鑑賞するための知識を広めたりする演劇教育ではない。観客に見せるためではなく、参加者が楽しむための演劇教育である。ここでは「上演」という結果よりも、皆で相談し意見を出し合う「過程が重要」で、「全員で一つの物を創り上げる」ことが何よりも優先される。そのためには「人間の生活や経験を振り返り、他者を観察せよ」と繰り返し教えられる。

これはIV(2)でペレイラ氏の「全編を通して、『演劇教育』という枠組みの中、『何かを教える』というよりも、『他者との触れ合い方を育てる』という印象を持った。」という指摘に呼応する。台湾では週3時間を割くほど、この力が重要視されているのだ。

ここでは教師や演出家ではなく、ファシリテーターという役割が重要になる。ウォーミングアップがその日のメインテーマに無理なくつながり、演劇をしたことのない学生たちも自然と身体を使って表現することの楽しさを体得する。ゲームから発表に至る過程が着実に段階を踏んでいることに驚きの声が上がった。大学教育において学識だけでなく人間力の養成が求められる現在、このファシリテーターとしての能力は、ゼミを運営する教員においても重要なものではないだろうか。

林教授の帰国後も引き続き中山ゼミ生の演劇発表会を指導された小原氏は、林教授のワークショップを受講した前後で「以前とはまるで違った協調性と創作の喜びを学生たちから感じる事ができた。」¹¹と書いている。

演劇部のように直接舞台に立つ機会のない学生たちには、今回の経験を個々の専門分野での成長に役立ててもらいたい。初対面やあまり親しくない人たちとチームを組み、一つのことを仕上げねばならない時には、他人の言葉に耳を傾け、自分の意見を臆せず発し、異なる意見に折り合いをつけることが必要になる。そこに生じる面倒くささ、おびただしい厄介ごと。それに耐える力が21世紀の人間には必要なのだという信念が、林教授のワークショップからは伝わってきた。

アンケートにあった「ぜひ、第2弾をお願い致します」の言葉に背中を押され、今後も林教授との交流を続けていきたい。次回は台南大学での教育現場を見学する機会が準備できないだろうか。できるならば現役の幼稚園、小中学校の先生を再教育する場に参加し、ファシリテーターに必要なテクニックを数多く体得してみたい。演劇教育の試みは、今後より対応の難しい学生が増えることが予想されるゼミ教育の活性化にとって、必ずや有益なものになると考えている。

本研究は、日本学術振興会 2019 年度第 1 回外国人招へい研究者（短期）の助成を受けた（課題「東アジアにおける教育演劇の実践と可能性」）成果の一部である。

注

- 1 中山文「ゼミ教育における演劇ワークショップの実践と効果－黑白劇社指導者桂迎教授をお迎えして－」教育開発センタージャーナル第4号 2013年
中山文「桂迎先生の演劇ワークショップ『交流之径』をめぐって」文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 地域力再発見をめざす大学と地域との連携・協働による実践的研究

- 報告書第9号平成24年度研究成果報告書〈地域研究センター明石グループ〉2014年
- 2 中山文「ゼミ教育における教育演劇の実践と効果－演劇ワークショップから上演発表会へ－」教育開発センタージャーナル第8号2017年
 - 3 3年次ゼミ生担当は小原延之先生、2年次ゼミ生担当は棚瀬美幸先生。いずれも関西小劇場界で著名の演出家であり、演劇ファシリテーターとしての経験も豊富である。
 - 4 中山文「上演がもつ教育効果をめぐる－考察」教職教育センタージャーナル第4号2018年
 - 5 『大学生における演劇教育の効果とファシリテーターの役割 — 日本・中国・台湾比較国際シンポジウム報告書』DVD2018年
 - 6 同5の「おわりに」で紹介したが、参加者の1人吉田美彦氏のご自身のフェイスブック（2018年2月4日）に上げられた報告を参照。
 - 7 上演後に劇団の音楽設計を担当する呂毅倫氏（女性）へ行ったインタビューによると影響・新劇場は2011年創設、児童劇の新分野を開拓し、青少年劇場をテーマに活動している。2015年、台南市文化局の要請をうけ「16歳小劇場－青少年演劇プログラム」を任された。劇団代表の演出家呂毅新（女性）は成功大学卒、ミシガン大学、モンタナ大学で演劇修士を取得。帰国後は高校教師をしながら劇団を立ち上げた。現在は教育演劇を指導しながら青少年向けの芝居を専門的に創っている。副演出家林禹緒（男性）は台南大学演劇創作と応用研究所修士を林先生の下で取得。嘉義大学中文系兼任講師でもある。このプログラムは3月に50名の高校生を公募。毎週1度舞台について授業を行い、自分の経験と物語から出発して創作を行う。7月から20回のリハーサルを重ねている。
 - 8 芸術文化観光専門職大学は、文部科学大臣から2020年10月23日付けで設置が認可された。平田オリザ氏を学長予定者に、2021年4月に開学する。<https://www.tajima-kakeru.jp/>
 - 9 前者については「台湾に学ぶ演劇教育の実践1——林玫君教授のKACにおけるワークショップから」人文学部紀要第41号、2020年3月予定
 - 10 http://www.aihall.com/lec%EF%BC%86ws_drama-edu/
 - 11 本ワークショップの前に、中山ゼミ生17名は神戸学院大学有瀬キャンパスで林教授のワークショップを4日間経験した。その後、7月末にマナビーホールで「アタシノアカシ第4弾——明石夏の恋物語」を上演したが、小原先生はその実技指導を担当された。

参考文献

- [1] デイヴィッド・ブース（2006）『ストーリードラマ－教室で使えるドラマ教育実践ガイド』中川吉晴、浅野恵美子、橋本由佳、五味幸子、松田佳子（共訳）東京 株式会社新評論
- [2] 林玫君（2017）『児童戯劇教育之理論与実務』台湾新北市 心理出版社
- [3] 林玫君（2018）『児童戯劇教育－童謡及故事的相違表現』上海 復旦大学出版社
- [4] アレン・オーエンズ、ナオミ・グリーン、小林由利子（編）（2010）『やってみよう！アプライドドラマ 自他理解を深めるドラマ教育のすすめ』東京 株式会社図書文化社
- [5] 武田富美子、渡辺貴裕（2014）『ドラマと学びの場 3つのワークショップから教育空間を考える』東京 晩成書房
- [6] 渡辺淳、獲得型教育研究会（2014）『教育におけるドラマ技法の探究「学びの体系化」にむけて』東京 株式会社明石書店